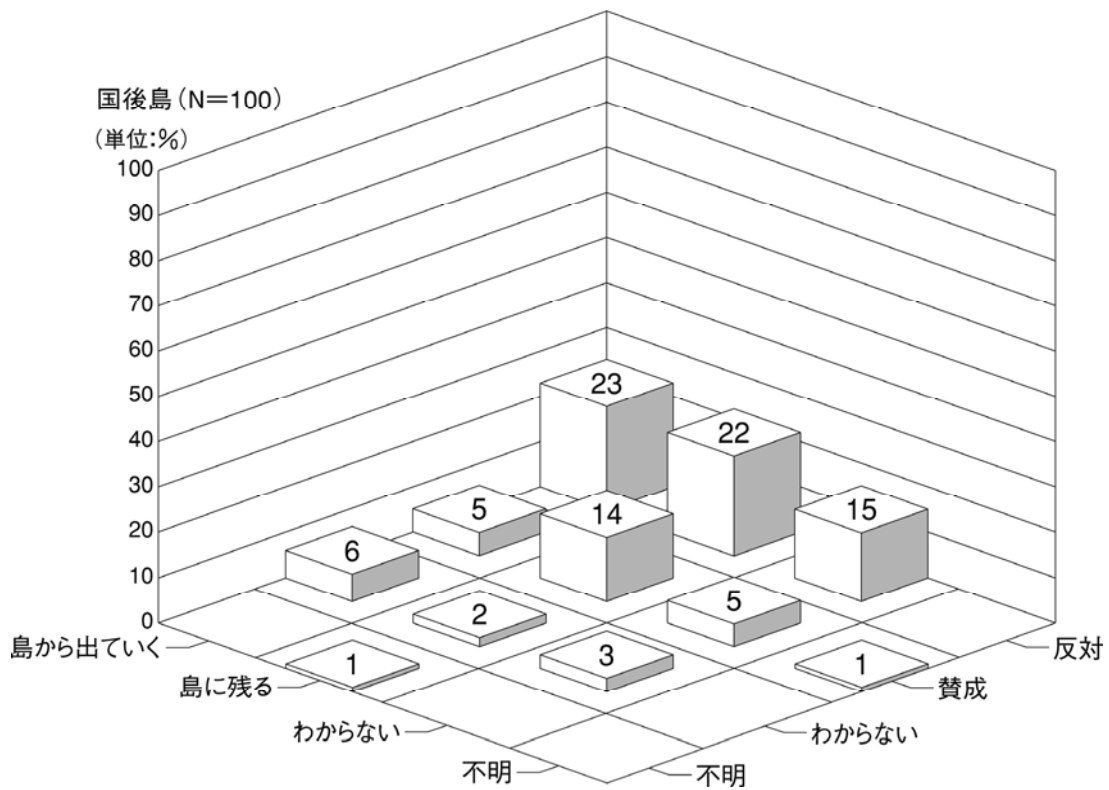
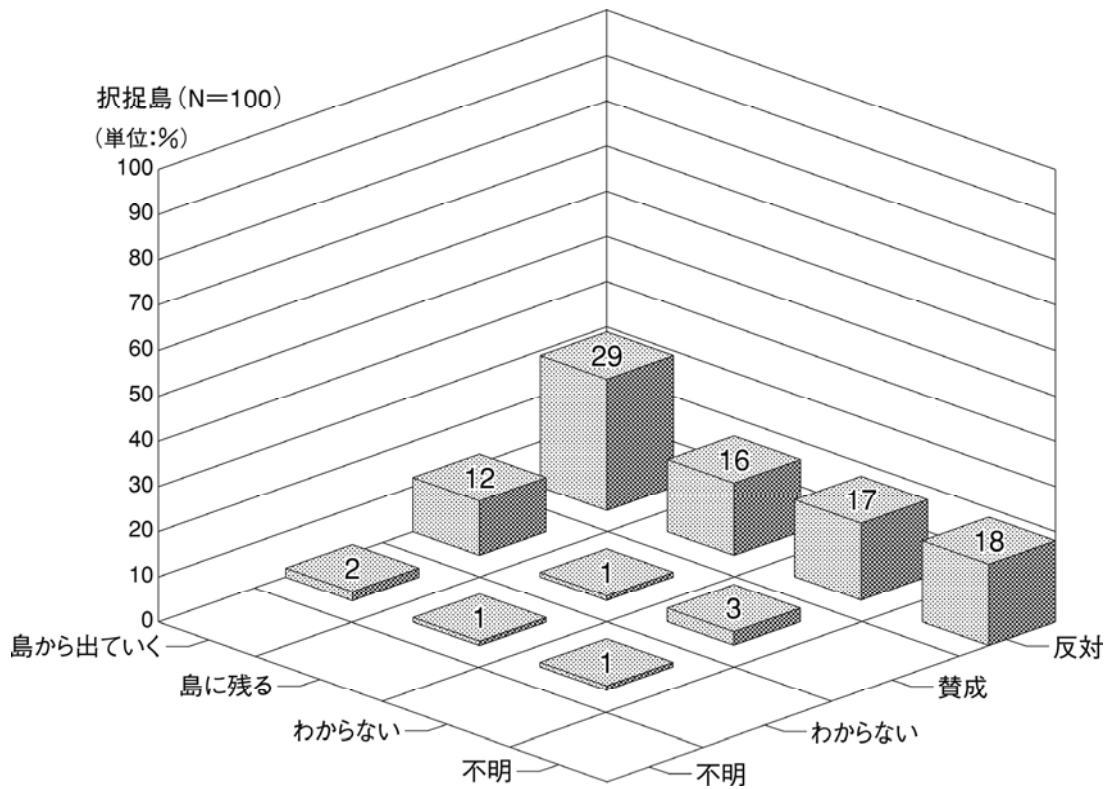
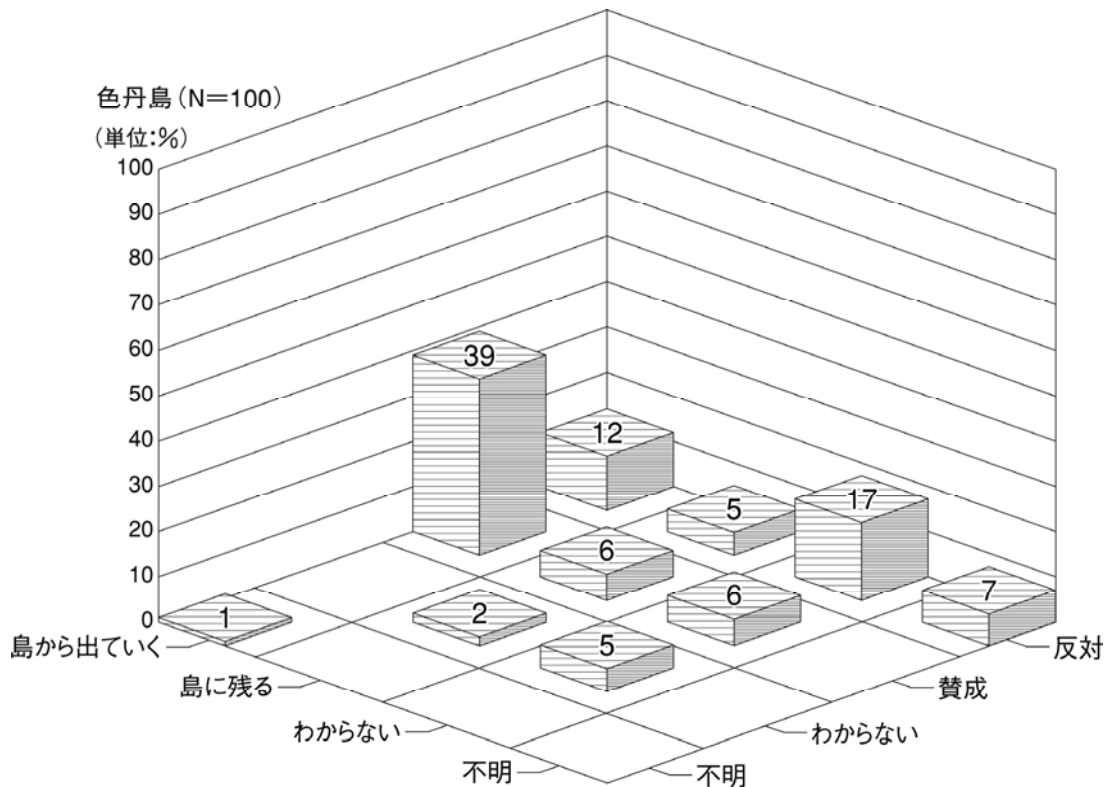


第2に、返還後の対応と返還の賛否の連関を島別に整理してみる。





択捉では「返還反対」で「島から出ていく」の傾向が強くなるのに対して、国後では「反対」の人でも「島に残る」と「出ていく」が拮抗する。これは国後の住民が、たとえ島が日本に引き渡された後でも島に留まろうと考えていることを意味する。さらに「賛成」の人でも多数が「島に残る」つもりであることがここからは読みとれる。対照的に、色丹では「反対」「賛成」にかかわらず「島に残る」とする声が少数だ。とくに「賛成」の大多数が「島から出ていく」とある。

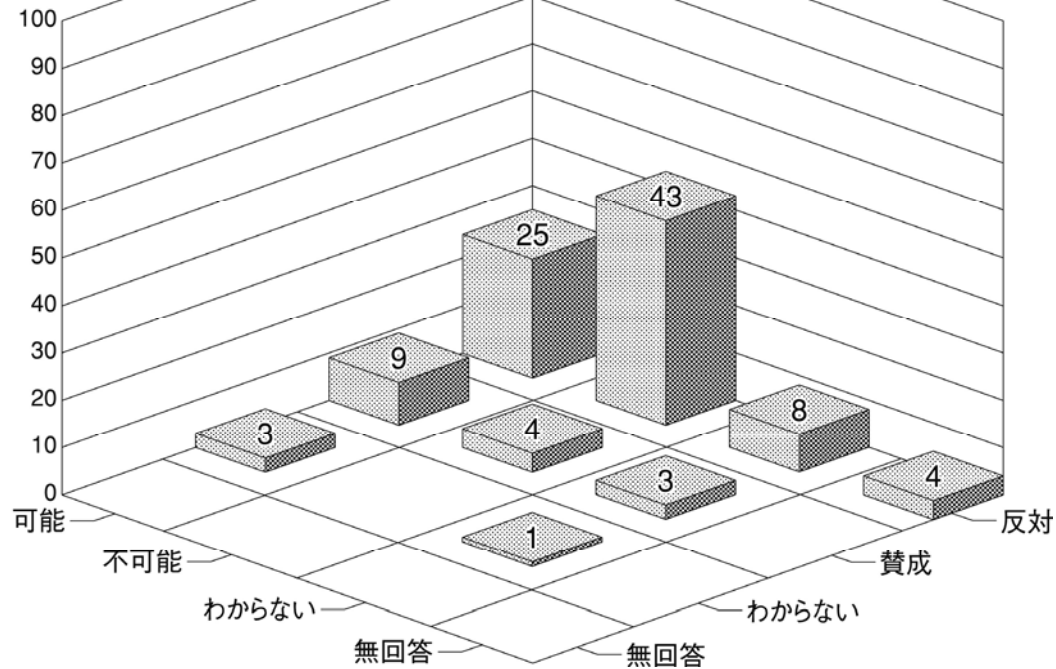
第3に、日本人との共住可能性を返還への賛否でブレイクダウンして島別に比較してみる。択捉では「反対」のなかで「不可能」とするものが最も強く、国後、色丹では「反対」のなかの「可能」「不可能」はほぼ拮抗している。顕著なのは、色丹では「返還賛成」にもかかわらず、日本人との共住は「不可能」と考えているものが「可能」とする声と同数である点だ。

これらの三次クロス分析及びすでに整理した各島ごとの返還問題に関わる二次クロスを総合すれば、次のようなことが明らかとなる。すなわち、色丹島では「返還賛成」が多数を占めるが、その代表的な意見は、彼らの多くは補償金をもらって出来る限り、島から早く退去したい、日本に帰属が決まった後に、日本人と共住するつもりはないとまとめうる。国後島では、返還の有無にかかわらず、日本人と一緒に暮らしてもよいとし、島に残れることがより重視される。択捉島では、「返還反対」の意見が強く、また日本人と一緒に暮らす意思も乏しい。

「北方領土」に暮らすロシア人の島ごとの意見の多様化もまた同様に真剣に分析されるべき対象であることが、ここでも明らかとなった。

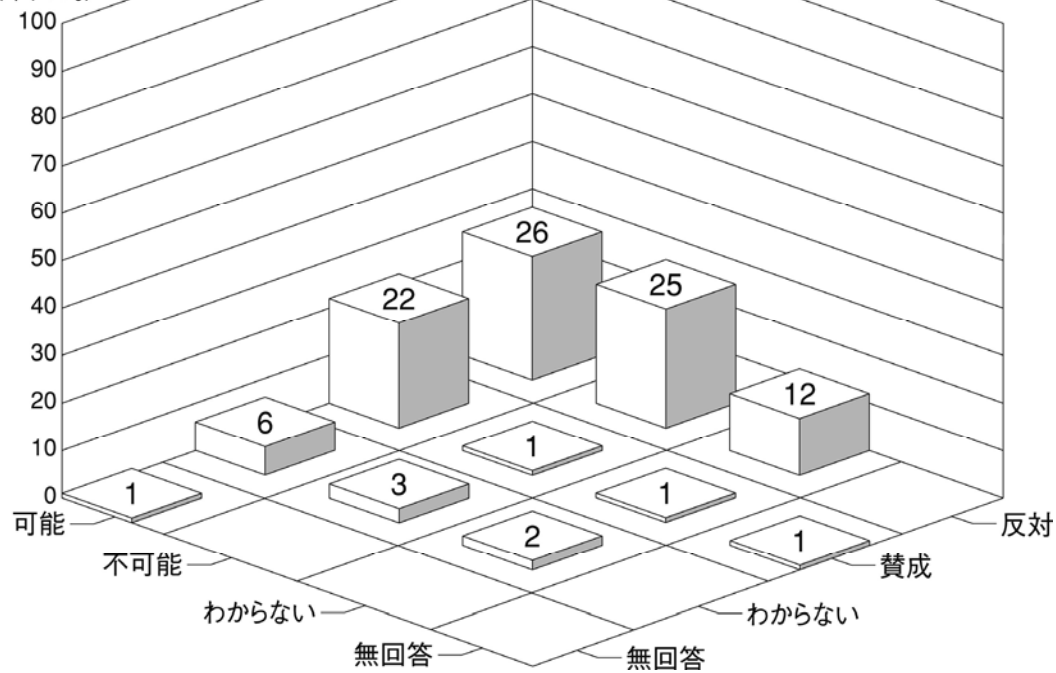
択捉島 (N=100)

(単位:%)



国後島 (N=100)

(単位:%)



色丹島 (N=100)

(単位:%)

